

# 原罪篇

## 映画文学人生論

- 091) 沈黙 監督：篠田正浩 原作：遠藤周作  
092) 氷点 監督：山本薩夫 原作：三浦綾子  
093) 戦場のメリークリスマス 監督：大島渚 原作：ポスト  
094) 死の棘 監督：小栗康平 原作：島尾敏雄  
095) 煙突の見える場所 監督：五所平之助  
原作：椎名麟三『無邪気な人々』

主なる神は、彼をエデンの園から追い出した

キリスト教の思想で仏教や神道にない異質の要素は原罪だと思う。原罪とは人類の祖先アダムとイヴから受け継がれた罪のことである。

ご先祖のおかげで生かされていると考える日本人には理解しにくいのが、私見によれば、遺伝子DNAのレベルで考えると、納得できる。DNAには生きていくために必要な情報がインプットされている反面、死につながる負の要素も含まれている。そのような負のDNAが原罪に相当すると考えることもできるのではなからうか。

それはともかくとして、キリスト教の原罪説を理解するために、五本の映画を観て、五篇の原作を読んだ。もちろん映画や小説で原罪が理解できるわけではないが、藁のようなヒントがつかめるのではないかと思ったからである。

遠藤周作『沈黙』

篠田正浩

三浦綾子『氷点』

山本薩夫

ポスト『戦場のメリークリスマス』 大島渚

小栗康平

椎名麟三『無邪気な人々』

『煙突の見える場所』 五所平之助

これらの作品の中で、原罪のテーマを正面からとりあげているのが『氷点』。主人公は自分に罪



## 原罪篇

映画文学人生論

があるという自覚はなかったが、殺人犯の子だと知らされて、自殺をはかる。人間には生まれながらにして原罪があることに気がついたが、自殺をしたところで罪が消えるわけではない。

一方、『沈黙』は人間の原罪よりも神の責任を問う背教者の物語のようだ。神を信仰する人たちが迫害を受け、殺されているのに神が沈黙を続けているのはなぜかという問いである。最近の事例では、東日本大震災の被害者には罪のない子どもたちが多数含まれていた。その子供たちも人間の原罪を償うために死んだのだろうか。

『戦場のメリークリスマス』は、映画では西洋のキリスト教文化と東洋の仏教文化を対比させた上でホモセクシャルのエロスで両者が結びつく可能性を示しているが、ローレンス・ヴァン・デル・ポストの原作では西洋のキリスト教と日本の仏教ではなく神道とを対比させている。

『死の刺』は映画と小説だけでは心を病んだ主人公夫婦がキリスト教に入信するプロセスがよくわからない。『死の刺日記』や作者の他の作品も読む必要がある。

五所平之助監督の映画『煙突の見える場所』は日本的な下町の人情話で感動させられたが、原作の椎名麟三『無邪気な人々』の実存的キリスト教文学とは異次元の作品という印象を受ける。

神の留守原罪懺悔するのみか